

# “Stufen” について

小澤幸夫

## STUFEN

Wie jede Blüte welkt und jede Jugend  
Dem Alter weicht, blüht jede Lebensstufe,  
Blüht jede Weisheit auch und jede Tugend  
Zu ihrer Zeit und darf nicht ewig dauern.  
Es muß das Herz bei jedem Lebensrufe  
Bereit zum Abschied sein und Neubeginne,  
Um sich in Tapferkeit und ohne Trauern  
In andre, neue Bindungen zu geben.  
Und jedem Anfang wohnt ein Zauber inne,  
Der uns beschützt und der uns hilft, zu leben.

Wir sollen heiter Raum um Raum durchschreiten,  
An keinem wie an einer Heimat hängen,  
Der Weltgeist will nicht fesseln uns und engen,  
Er will uns Stuf' um Stufe heben, weiten.  
Kaum sind wir heimisch einem Lebenskreise  
Und traulich eingewohnt, so droht Erschlaffen,  
Nur wer bereit zu Aufbruch ist und Reise,  
Mag lähmender Gewöhnung sich entrafen.

Es wird vielleicht auch noch die Todesstunde  
Uns neuen Räumen jung entgegen senden,  
Des Lebens Ruf an uns wird niemals enden...  
Wohlan denn, Herz, nimm Abschied und gesunde!

Hermann Hesse

## 段 階

どんな花でも萎れ、どんな青春でも老いに道を譲るように  
どんな人生の段階にも、どんな英知にも、どんな美德にも、  
それぞれの盛りがあり

永遠に続くことはありえない。

心は生の呼びかけを聞くたびに

別れを告げ、新たに始める用意ができていなければならない。

勇気を持って悲しむことなく

新しい別の結びつきに身をゆだねるために。

どんな始まりにも本来魔法が備わっていて、

私たちを守り、生きる助けとなってくれる。

私たちは朗らかに空間から空間へと渡り歩き、

どんな空間にも故郷のようにしがみついてはならない。

宇宙の精神は私たちを束縛したり狭い所に閉じ込めたりせず、

私たちを一段一段と高め、広げようとする。

私たちがある生活の領域に慣れ親しみ定住してしまうと、

たちまち弛緩してしまう虞れがでてくる。

目覚め旅立つ用意のできているものだけが

惰性から抜け出すことができるのだ。

ひょっとすると死の瞬間でさえ私たちを新たな空間に向かって

はつらつと送ってくれることがあるかもしれない。

私たちに対する生の呼びかけは終わることがないだろう...

されば心よ、別れを告げ健やかになれ！

ヘルマン・ヘッセ

(小澤幸夫 訳)

“Stufen”は1941年に作られた詩で、翌年6月の“Neue Rundschau”に「二遍の詩」の一つとして発表された。1943年に書かれたヘッセの畢生の大作『ガラス玉遊技』の中には主人公ヨーゼフ・クネヒトが学生時代に作った詩として収録されている。晩年に出版社の求めに応じて自作の詩をヘッセ自身が選んで編集した時にも、書名にこの題名を用いている。またヘッセ自身が自作の詩を何編か録音した際にも、この詩を入れている。これらのことから分かるようにこの作品はヘッセがもっとも愛した詩の一つとってよいであろう。

内容についてはあらためて述べる必要もないであろう。思春期の苦しみから老年の輝きに至るまで、ヘッセは様々な人生の段階をくぐり抜けてきた。だが今いる段階は常に次の段階に到達するために踏み越えて行かなければならない段階なのであり、死の瞬間ですら我々を新たな世界へと送り出すかもしれないのである。「人生をいかに生きるべきか」ということを終生のテーマにし、実践してきたヘッセならではの作品といえよう。

“Stufen”を一応「段階」と訳したが、「階段」と訳すことも可能である。ヘッセ終焉の地モンタニョーラにあるヘッセ記念館には階段の一段一段にこの詩の一行一行が貼り付けられており、見学者は階段を上りながら、この詩を味わって行けるようになっている。各国語の訳が置いてあったが日本語訳がなかったので館員に尋ねたところ、まだないということで翻訳を依頼され、筆者が訳した。